

渡瓶

〔書言字考節用集七器財〕シロビ渡瓶本名

〔言經卿記〕慶長八年二月廿三日庚戌、松田勝右衛門、中國酒、白ネリ、鴨一番等持參被來了、略○中 大樹

○徳川 家康 御參内ニ付而、車之事談合、廿五日壬子、松田勝右衛門ヨリ可來由有之、然共北向所勞ニ

而、ヤガテ可罷向由申遣了、後刻罷向、書籍ドモモタセ了、朝食相伴了、注進了、

檳榔車略○中

一玄びん之事可有之候略○下

かはこ

〔宇治拾遺物語三〕今はむかし兵衛佐平貞文をばへいちうといふ、略○中 本院侍従といふは、村上の

御母後の女房なり、世の色このみにてありけるに、文やるにくからず返こととはしながらあふ

事はなかりけり、略○中 いまはさは、この人のわるくうをましからんことを見て、おもひうとまば

や、かくのみ心づくしに思はでありなんと思て、すいぞんをよびて、その人のひすましのかはこ

もていかんばいとりてわれにみせよといひければ、日ごろそひてうかゞひて、からうじて、にげ

けるををひて、ばいてとりて、さうにとらせつ、

〔安齋隨筆前編五〕樋殿略○中 貞丈云略○中 樋殿シノハコをマルと云は、日本紀に尿マル、屎マル

とあるによりてなるべしと、物部茂卿が説也、然りマルとは放よむと、事也、又オカハと云は、御廁

カシカハヤの略也、

〔南留別志二〕一小兒の糞器をまるといふ事は、日本紀に、いばりする事をいばりまる、大便する事

をくそまるといふより出でたるなるべし、

〔倭訓栞前編二十九〕まる略○中 神代紀に遺糞をくそまるとよみ、古事記に屎麻理散と見え、紀に

小便にゆばりまる、大便にくそまるといへり、萬葉集にも屎遠麻禮とよみ、竹取物語につばくら

めのまろおほるこそといへり、今便器を稱じてまるといふも是なるべし、ふるくより見えたり、

まる